京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	静脩 Vol. 53 No. 3(2016.10)[全文]
Author(s)	
Citation	静脩 (2016), 53(3)
Issue Date	2016-10-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/217242
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

Kyoto University

京都大学図書館機構報

静脩

SEI-SHU

2016
10
Vol.53 No.3

特集

ブックレビュー
わたしの人生を決めた本

CONTENTS

02 : ブックレビュー　わたしの人生を決めた本
06 : 教員寄贈図書
07 : オープンアクセス方針説明会について
08 : 図書館・室からのおしらせ

”『蝦夷地別件』から逃げられない ”

『 蝦夷地別件 / 船戸与一著 ; 上・中・下 . 小学館 , (小学館文庫) 』

わたし程度の心の弱い人間であれば、人生の方向を変えることくらい容易である。だから、わたしを変えた本は多い。本を読み終わったあと、ふと見上げて広がる景色が、いつもより大きな心臓の鼓動とともにこちらに迫ってくる、なんて経験は結構多い。

しかし、わたし程度の記憶力の人間であれば、内容を忘れた本もやはり多い。そうなると、ここで紹介できる本は極端に少なくなる。大岡昇平の『野火』、カフカの『変身』、石牟礼道子の『苦海浄土』など、実際にほのかに甘いような苦いような味が舌に残るような読書体験はいまでも鮮やかに記憶されている。

船戸与一の『蝦夷地別件』も強烈だった。船戸のハードボイルドは、文字通り貪るように読んだ。ゲリラへの武器密輸、民衆の武装蜂起、秘密警察の暗躍など、闇社会を生きる人々の生と死を鼻に付くほどキザに、しかも悲惨に描く。彼の作品の登場人物たちは、しばしば、乾いた唇を腕で拭う。何ヶ国語も自由に操る。トヨタのランドクルーザーに乗る。急に性欲が暴走する。よく食べ、よく飲む。死ぬときにプツンと神経が切れる。船戸以後、わたしは、叙述の細部にこだわり始め、ハンドルをステアリング、お茶を「淹れる」と表記してみたりした。要するに憧れたわけだ。

なかでも、文庫で三巻本になる『蝦夷地別件』のスケールは半端ではない。近世のアイヌ部族の反乱と幕府による制圧を扱ったものだが、啓蒙期ポーランドの貴族が、バイカル湖までやってきてアイヌに武器を売るなんて、どうして想像できるのだろうか。船戸は歴史書を読みこなしたうえで、物語を構想しているから、時代考証もしっかりとしている。

また、アイヌ部族のなかに入り込んできた優しい武士が、江戸幕府の間諜であることが徐々にわかるのだけれども、その「徐々に」わかっていく演出がにくい。『蝦夷地別件』もそうだが、争いとは、にらみ合う二者が戦うものではなく、第三者によって二者が戦わされるものである、というのが船戸与一の歴史観である。歴史の大きな歯車のなかに、若い人生をかけて権力に抗する人間の美しさを描いて読者を麻痺させたあと、急に手のひらを返して、この人間は第三者の手のひらで踊っているにすぎないことを伝える。この残酷なフィナーレに、わたしはいつも酔いしれていた。鳥の眼、つまり社会科学的視点と、虫の目、つまり人文科学的視点の奇跡的な共存こそ、わたしの力不足をはっきりと意識させたあとに、何かを語る喜びを教えてくれたのである。

そして、『蝦夷地別件』以後、歴史学とは何か、という問いはわたしにとって重くなる。ユーラシア大陸をまたにかけるような世界史の想像力や、明日の仕事よりもいまの一行の牢屋に読者を閉じ込める文章の力を、歴史研究者は、どこまで得ようと修行してきただろうか。

昨年の春、七十一歳で亡くなった。死の寸前で書き終えた『満州国演義』は、もったいなくて、まだ読めていない。

藤原 辰史　ふじはら たつし
（人文科学研究所准教授）

― 所蔵館・室 ―

附属図書館

2F 開架　KH||165|| エ 1